The Japan Society of Educational Sociology

大学生における老親への扶養意識 および 老人観
― 日・台・韓の比較をもとに ―

細江　容子　共立女子短期大学
○ 保坂久美子　お茶の水女子大学

1．研究目的

日本においては、「超高齢化社会」の到来が予測されているが、台湾・韓国においても日本と同様に高齢化社会への移行速度は急激であるといえる。このように高齢化の急激な進展の中、将来高齢者を背負っていく世代は現在の青年層であり、彼らの持つ老親への扶養意識や老人観を知ることは、老人問題教育を進めていくうえでも意義のあることと思われる。日・台・韓の３カ国は共に儒教による教えをその意識の基礎としながらも、産業化、教育、家族制度、福祉制度などの要因は国ごとに異なっており、それが青年の意識にも影響を与えているといえる。ここでは、それぞれの国の青年層の意識のちがいをこれら３カ国の比較をもとに、明らかにする。

ここでは、

1）今日の青年層（ここでは大学生を対象とした）が親の老後に対し、どのような責任意識を持っているのかを特に扶養意識（同居扶養・経済扶養・介護扶養への責任）に限定してとらえ、３カ国の相違を明らかにする。さらに老人観についても３カ国でどのようなちがいがあるのかを明らかにする。

2）また、彼らの扶養意識や老人観は何によって規定されるのかを３カ国の比較で明らかにする。

2．調査方法

《日本》調査実施　1986年6月末～7月　自記式質問紙法による
　　調査対象　東京都内及びその近郊７大学（私立５校，国立２校）の学生567名，
　　男子270名，女子297名

《台湾》調査実施　1986年9月～10月　自記式質問紙法による
　　調査対象　台北市内及び市近郊８大学（私立５校，国立３校）の学生512名，
　　男子244名，女子268名

《韓国》調査実施　1986年6月～7月　自記式質問紙法による
　　調査対象　ソウル市内８大学（私立７校，国立１校）の学生511名，
　　男子293名，女子218名

3．調査対象者の基本的属性

	1)家族構成	2)家族員数
日本	核家族 73.4%，直系家族 19.6%	４人（43.4%），５人（28.2%）
台湾	核家族 66.6%，直系家族 15.4%	５人（29.7%），６人（22.1%）
韓国	核家族 67.3%，直系家族 11.4%	５人（29.7%），６人（22.7%）

3）本人の続柄	ひとり息子，長男	ひとり娘，姉妹のみの長女	その他
日　本	34.2%	14.8%	51.0%
台　湾	24.2%	6.1%	69.7%
韓　国	23.8%	7.9%	68.3%

4）父親の職業	経営管理	専門技術職	商業サービス・自営	事務
日　本	31.9%	16.2%	15.7%	13.6%
台　湾	8.4%	14.8%	21.5%	13.9%
韓　国	10.8%	8.8%	33.3%	11.7%

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

5) 祖父母との同居経験	現在同居	過去に同居	同居経験無し	(N.A)
日　本	21.9%	27.3%	50.6%	(0.2)
台　湾	19.3%	53.7%	21.3%	(5.7)
韓　国	14.3%	47.7%	26.0%	(11.9)

4．分析結果

1) 親の老後への責任意識

《同居扶養意識》台湾，韓国の学生は日本の学生に比べて同居意識が強い。日本の学生は「親がある年齢になったら同居」「親が病気になったら同居」といった途中同居志向であるのに対し、台湾，韓国の学生は「結婚したらすぐ同居」といった結婚同居志向が日本に比べて強い。同居理由については、台湾，韓国とも「親と住むのが当然」だからといった規範的要因をあげるものが、日本より多い。同居意識を規定するのは、日本では本人が長男・長女であるといった続柄の要因が強く作用している。台湾，韓国に於いては、長男であるか長男以下の男子であるかといった続柄と性差の要因が強く作用している。

《経済扶養意識》「どんなことをしても親を養う」といった経済扶養意識は日本，台湾，韓国とも全体に強いといえるが、台湾，韓国では日本よりもかなり強いといえる。この扶養意識は、本人の出生家族への満足度によって規定される傾向がある。

《介護扶養意識》親が病弱又は寝たきりの場合の世話は、日本，台湾，韓国とも「なにをおいても」といった意識が強いが特に台湾，韓国においてその傾向が強く、この介護意識を規定しているのは本人の出生家族への満足度である。

2) 老人観

《老人に対するステレオタイプイメージ》ステレオタイプイメージはアメリカで Palmore によって開発された Knowledge of old people Score に基づいて作成したものである。大学生が老人に対して持っている誤ったイメージは日本で一番強く、次いで韓国、台湾となっている。

《ＳＤ法によるイメージ》大学生の持つ老人イメージは、相反する形容詞対を尺度とする Semantic Differential 法(ＳＤ法）によって測定した。尺度は若者の老人観や老人イメージに関する過去の調査や文献から収集した。最初108対の形容詞があげられたがその中から意味の類似しているものやあいまいなもの、またハングル語や中国語に翻訳不可能なものが除かれ、最終的に50の形容詞対が選択された。それぞれの形容詞対には７段階尺度が付されている。

尺度の平均得点によってイメージをみると、３カ国とも老人に対するイメージは否定的なものとして「地味な」「灰色」「遅い」「内向的」「保守的」などがあらわれており、肯定的なものとしては「あたたかい」「優しい」などがあらわれている。また、日本においては台湾，韓国と比べて「弱々しい」「遅い」「非生産的」「鈍い」といったイメージが強く、それぞれの国の産業化の進展やそれに伴う価値観の変化などがイメージに関係しているのではないかと思われる。

NII-Electronic Library Service